

天
下
無
雙
目
次

第一章 孤高の技……………7

神業の域にある凄腕の匠たち／大企業と五分と五分で渡り合う／引退で歩みを止めた奇跡の技／謎の多い物質「鉄」／大和時代に存在した鍛造職人集団／自動車産業を支えた鍛造品／自由鍛造の世界を切り拓いた平昭七／鉄と話ができる男／日本一の精度を誇った大型リング／発注元にメリットをもたらす技術力／流れるような鉄の繊維が生む強度／特製の治具を操る独特のロール鍛造／コンピュータ解析不能な神秘の技／厚いベールに包まれた特製マシン／カリスマが育てた異能集団／業界に異彩を放った一匹狼／学術のプロも抱いた共感とは…／平には伝承不能な方程式と公式がある／用と美を兼ね備えた究極の仕事

第二章 修羅のごとく……………49

村の鍛冶屋の三男坊／父親の病気で暗転した暮らし／「暴れ者のどこが悪い」／器用な自分には必ず運命の仕事がある／人生を縛った母の呪文「金持ちになれ」／「堂々とした金持ちになってみせる」／腕っ節の強さを競う鉄火な世界／「超一流の鍛造工のし上がりた」／成功にも失敗にも必ず原因がある／揺るぎない「腕技脳」のプロセス／同僚を不思議がらせた平流の治具／ありがたかった独立の誘い／終生のパートナー井村との出会い／生涯初のローリングミルに投資／「他人の十倍、百倍の努力をせい」／百万円を握った母の嬉しい顔が形見になった／業界からいなくなつて欲しい男

運転資金のめど立たず／危機を救った日本精工の専務／融資を即決した信用金庫理事長／融資が追いつかない猛烈な成長／借金を屁とも思わない怖い奴／「誠心誠意」の奥底にしたたかな計算／両刃の剣になった厄介な下請／常軌を逸した仕事ぶり／「日曜日も働きたい奴はいるか」／率先垂範の名親方／一緒に働く社員もまた家族／十五の春から仕込んだ職人／「頼むから怒らんといて」泣きついた祖母／成長の足がかりは大手ベアリングメーカー／胃を全摘出し片肺機能を失った鍛造の鬼／建設機械の性能を向上させたひらめき／電話を抱えて寝た司法書士／「米が採れん」の抗議に農地を買う／外資との提携に「吸収」の危機感／売上は純粋な加工賃の積み重ね／無借金経営で「百億長者」の誓い実現／現場は男の世界、事務所は女の世界／相次いで亡くした家族に無言の感慨／「鍛造と決別してもいい」／「平ほど扱いにくい相手はいなかった」／「親父は平鍛造の教祖みたい人」／間違いなく業界の一時代を担った人／周囲が慌てた廃業宣言／「やるだけやった」充足感が救い

自動車産業と発展した鍛造業界／戦争で需要が増えた鍛造品／海外視察で最新技術を吸収／公害の発生で誕生した鍛造団地／自他ともに認める特殊リングのトップランナー／平鍛造が異彩を放った土壌／業界の平鍛造批判は的外れ／いかに安く作れるかが評価の対象／生き残りの鍵は「経験知」と「手技」／「明日からお宅の仕事はしない」と言う気骨／ベテラン職人のリタイアが損失をもたらす／東京スカイツリーは希望の象徴／職人に値打ちがあった時代／平昭七は職人仲間の太閤秀吉／新しい一筋の道／未練がましくあってはならぬ／皮肉な過剰品質という不運

第一章 孤高の技

神業の域にある凄腕の匠たち

ものづくりの国、日本を支えてきたのは、神業の域に到達した名もなき凄腕の匠たちや、一つの分野で傑出した技術を持つ中小企業である。

とりわけ金属加工の業界において、東京都の大田区、大阪府の東大阪市などは、世界をうならせる超絶の技術で生き残る町工場の集積で名高い。

ほかに誰も追従できない加工技術、特異な技を持つ町工場がたった一つ消えてなくなるだけで、途端に世界のライバル企業から遅れをとって、先行きが怪しくなってしまう産業もあるといわれる。

それゆえに、卓越したオリジナルの技術を手にした小さな企業、町工場のなかには、巨大な資本を持つ大企業から「あの会社の技術を我がものにしたい」と虎視たんたん狙われ、大手企業の傘下に組み込まれたあげく、生命線だった門外不出の技術を丸裸にされ、お払い箱にされてしまうところも少なくない。

大企業の論理がまかりとおる世界、資本の力が物差しになる弱肉強食の世界において、「しょせん下請、孫請」と見下されがちな部品メーカーの多くは、優れた技術や人材を抱

えていながら、ともすれば弱い立場に甘んじなければならぬ。

ものづくりの業界では、オンリーワンの技術を秘匿ひかくして、強烈な存在感を示すことができない限り、規模の小さな企業は仕事を与えてくれる大きな企業にすり寄って、短納期でしかも少ロットといった無理難題に首を縦に振り、安い工賃にも我慢し続ける悲哀を味わうことになる。

「それが嫌なら、仕事は中国、東南アジアへ持っていく」。多くの中小企業が、こんな脅おどし文句に言い返す言葉すらなく、「自分たちは大企業の奴隷なのか」と抵抗をあきらめしてしまう図式は、日本のものづくりの世界においてもはや当たり前とされている。

しかし圧造という、熱く焼いた鉄に圧力かけてものをつくる鍛造たんぞう業界には、そんな強者と弱者の関係をものともせず、独り思いのままに右肩上がりの経営を貫き通した鍛造メーカーが半ば伝説と化して存在した。

まして、それほどの強烈な個性を持った企業が、日本の基幹産業が集中する太平洋側の工業地帯から遠く離れた石川県の能登半島で産声をあげ、関連業界から驚異の目で見られるまでに急成長を遂げていたことを知る人は、業界の関係者を除けば、決して多いとはいえない。



鍛造の世界から身を引いた平は今、無農薬の果樹栽培に取り組んでいる

大企業と五分と五分で渡り合う

この会社とは、そこでしか生産できない大型鍛造リングを武器に、輸送コストで太刀打ちできない重いハンディキャップを軽々と跳ね返し、発注元の大企業群、総合商社などと五分と五分で渡り合った平鍛造株式会社である。

能登半島の中ほど、邑知地溝帯に緑濃い農地が広がる羽咋市で、昭和四十三（一九六八）年に操業を始めた平鍛造の創業者は、十八歳の年に「必ずひと旗あげてみせる」と飛び出した東京で、いくつもの鍛造メーカーを渡り歩き、古里に錦を飾る自信を深めて出身地に舞い戻った平昭七だ。

平は今、鍛造の一線から身をひいている。手塩にかけた会社の行く末を案じながら、新たに立ち上げたのは無農薬の果樹や野菜を栽培する平農林株式会社である。

新しい挑戦に目を輝かす平は、記録づくめの酷暑となった平成二十二年の夏、自分の子や孫のような二十人あまりの若い社員たちと汗だくになりながら、自宅近くの広大な農地で土にまみれた。

九月の初旬には、試行錯誤の末に無農薬で育てたリングを初収穫して顔をほころばせ、

愚直に向き合うのが真っ赤に焼けた鉄であれ、乾いた大地であれ、絶対に妥協を許さない頑固一徹な「ものづくり」職人の一面をのぞかせた。

本書は、荒い気性を寡黙^{かもく}さで覆い隠し、仕事以外のことでは人付き合いを好まない平が、初めて自らの来し方を語った半生の記録である。しかし、徒手空拳で起業した男が至難の無借金経営を成し遂げ、巨万の富を築きあげるまでのサクセスストーリーではない。

八十年に近い平の愚直な人生に一つ大きな意義を見出すとすれば、主にベアリング業界、建設機械業界に精度の高い鍛造部品を安定して供給し続け、決して表には出ない下請の鍛造加工賃メーカーでありなが

ら、日本のものづくり産業の屋台骨を隆々と支え続けた、その一点に尽きる。

平固有の精密な加工技術は、焼けた鉄の色の変化で読み解く温度、鉄をハンマーなどの加工マシンで鍛える時に出る音を微細に感じ分け、人間の五感に平自身の勘を加えた「六感」を駆使したものだ。

引退で歩みを止めた奇跡の技

まるで生き物であるがごとく、聞き分けのない猛獣が暴れるがごとく、激しくうねる鉄と言葉を交わしているようにも見えたという平の仕事ぶりは、長く苦楽をともした社員たち、取引のあった業界の関係者たちの脳裏に今も鮮やかに残っている。

夜となく昼となく絶えず現場に立ち続けた平が心血を注いだ鍛造品は、その体に宿った感性、極端に言えば、自分でも言葉にはしにくい「奥儀おくぎ」によってのみ製造が可能だった。平の鍛造のプロセスの一部始終を学術的な分析、解析によって第三者が再現することは不可能とさえ言われている。

それゆえに平の現役引退は、一つの奇跡的な金属加工技術がそこで進化の歩みを止め、今のままでは、やがて人々の記憶からも、産業界の記憶からも消えてしまいかねないこと

を意味している。

今、平の業績に絞って評伝を書くこうとするのも、業績を惜しむ関係者が平の背中を押して取材の前に端座することを勧めたのも、古くから日本に伝わる鍛造の技術史に「平昭七」の名前をとどめ、その難解さゆえにスタンダードにはなりえなかった「孤高の技」が昭和から平成の時代をまたいで、一時期、華やかに輝いていた事実を永遠に残したい一心であることを、あえて記しておきたい。

平がどんな人生を歩み、類たぐいまれな技術を身につけるに至ったのかを書いていく前に、そもそも平が終生、格闘し続けた鉄とは何か、鍛造とはどのような金属加工を指すのか、平鍛造が作り続けた鍛造品がどのようなものであったのかを書いておかなければ、平が鍛造職人として生きた歳月を理解してもらうことは容易でない。

こうした事情から、本書の骨格ともいえる平の人生模様は第二章以降に綴っていく。

謎の多い物質「鉄」

「鉄」という言葉は本来、元素の名前として存在する。「鉄」は宇宙の中に存在する原子のなかで最も数が多い。これは鉄の原子核が最も安定していることが理由と考えられている。